公開講演

藤原道長と『御堂関白記』

Fujiwara Michinaga and *Midō kanpakuki*

山中　　裕*

What is written in *Midō kanpakuki*, the diary of Fujiwarano Michinaga? What are the essential qualities of the diary? I would like to consider these questions in conjunction with the portrait history has painted of Michinaga.

In his political life, Michinaga held the ranks of *Nairan*（内覧）*sadaijin*,（左大臣）*sessho*,（摂政）and *dajō-daijin*,（太政大臣）serving the Ichijō, Sanjō and Goichjō emperors. During the reigns of these three emperors, his daughters (Shyoshi, Kenshi and Ishi) served at court with the rank of *chūgū*. The Goichijō emperor was Michinaga's grandson. After he became emperor at the age of nine, Michinaga advised him as *sesshō*. Moreover, Michinaga's daughter, Ishi, served in the court of this Goichijō emperor and Michinaga was on intimate terms with those in the imperial household. When Ishi became the empress Michinaga composed the famus *waka*, "*Kono yo oba*…"

However, Michinaga spent the greater part of his career as *nairan*, becoming *sesshō* for only one year in the reign of the

* 山中　　裕　関東学院大学教授

Goichijō emperor. He subsequently relinquished his title as *sesshō* to his eldest son, Yorimichi, and became *dajo-daijin*, but took the tonsure shortly afterwards and built Hōjōji Temple. He died December 4, Manju 4 (1027). His life after taking the tonsure is recosded in detail in *Shoyuki* (小右記) *Eiga monogatari*, and other writings, but not in *Midō Kanpuku ki*, for the latter is the record of Michinaga's political life.

Fourteen volumees of *Midō kanpukuki*, written in Michinaga's hand, are now preserved in the Yōmei Bunko in Kyoto and are regarded as a very valuable treasure. Today I would like to compare the Michinaga presented to us in *Shoyuki, Gonki*, (権記) *Eiga monogatari* and *Ōkagami* with that revealed in *Midō Kanpakuki*, and seek to throw some light on the question of the connection between the historical figure, Michinaga, and Hikaru Genji, the hero of *Genji monogatari*.

先程、マカラさんが大変結構なお話しをなさって、日記の問題に関して、いろ々と話されたので、その後、藤原道長と、『御堂関白記』のお話しを致すのでございますが、まず、藤原道長の生涯を少し話して、それと日記との関係を、これから述べてみたいと思います。

まず、お手元にお配りしてある藤原道長と『御堂関白記』のプリントに、概略が書いてあるので、ちょっと読んでみます。

藤原道長は『御堂関白記』に何を書こうとしたか。『御堂関白記』の本質は何か等を道長の人物と共に考えたい。道長は政治家として、内覧左大臣、摂政、太政大臣にまで進み、一条、三条、後一条と、三代の天皇に仕えている。このうちの三天皇に各々、中宮彰子、妍子、威子が入内し、中宮になってい

る。更に後一条天皇は道長にとって、外孫である。幼帝を補佐し、摂政の職を果たし、幼帝（後一條）の母は、三女、威子が中宮となっているので、全く天皇と深い身内関係となっている。その威子が立后の時に、道長は「この世をば……。」の歌を詠んでいる。これは三女、威子の後一条天皇の中宮に立った時に、満足感にみちみちて詠んだものと思われます。この歌は、色々に解釈され、「この世をば、我が世とぞ思ふ……」ということで、道長は誤解されている、けしからん奴だという説が出てくる点もあるので、道長がどういう生活をしたかという様なことからまず話して参ります。

道長は、966年（康保3年）に生まれていますが、これも、その証拠が有る訳ではなく、生まれたという年に関しての文献が残っている訳でもない。亡くなった年が、1027年（万寿4年）なので、それから逆算すると、康保3年生まれになるわけです。

道長については『御堂関白記』を初めとして、『小右記』、『権記』、『栄花物語』、『大鏡』と、非常に多くの資料が存在していることは、よく知られているところですが、亡くなった年に関しては、『小右記』を初めとして、非常に文献が多いにもかゝわらず、生まれた年については、どれも記していない。

誕生の年を康保3年であるとしても、道長の幼少時代もよくわからない。ただ、道長が生まれた頃には、父親の兼家が、大変順調な時代で、兼家の意志によって、子供達（道隆、道長ら）を、どんどん昇進させている。これは、兼家の方針であり、一例をあげると、永延2年、道長は23歳の時に、非参議から参議を経ないで、いきなり権中納言になっている。これは非常な昇進で、兼家は長男の道隆と道長をとんとん拍子に昇進させることに、一生懸命であったようです。3年後の26歳の時には、権大納言になっている。

また、道長の兄、道隆は摂政。その長男、伊周も、この頃非常に昇進しており、正暦2年、道長の26歳の年に、伊周も参議のとき、七人を越えて権中納言に昇進している。道隆は、自分の摂政関白の地位を、後に伊周に譲りたいと一生懸命になるが、これに道長が加わって、伊周と道長のライバル関係

がはじまってくる。26歳の正暦2年に、道長は権大納言になるが、一方伊周も翌年には権大納言（19歳）となる。また、その翌年、道隆は関白となっている。この辺から、道隆の世の中となりますが、道隆一家の事を「中関白家」と言う。何故、中関白家というかは、いろいろ問題がございますが、兼家の時から摂関政治は大きく進展し、強いものになっていく。というのは、兼家までは太政大臣と摂政・関白とが一体となって、1人の人物が、太政大臣であり、かつ摂政・関白の資格を有していたが、この、兼家の時から、摂政と太政大臣が別々に存在することとなる。

兼家の時は、太政大臣として頼忠がおり、普通の場合であれば、兼家は自分が太政大臣となり、それから摂政となるのが当然なのだが、太政大臣の頼忠が大変長生きで、とても待ってはいられないという状態から、強引に摂政となってしまい、太政大臣は頼忠、摂政は兼家という形となり、初めて摂政が太政大臣と離れて独立した存在となる。

中関白家と言うのも、兼家、道隆、道長の3人を、1.2.3と勘定すると、その3人の時に、摂関政治というものが特に発展し、まん中の道隆の所を特に、中関白家と呼ぶのではないかという説もあるが、これはまだ、はっきりしません。道隆の一家の事を中関白家という呼び方は、既に平安時代の『赤染衛門集』等にも出てくる訳で、平安時代の道長の時代から中関白家という呼び方は、はじまっていました。

中関白家としては、道隆が摂政関白となり、その後は当然伊周に譲りたいと思っていた所が、道長というライバルの出現で軋轢が生じてきます。

長徳元年、道長の30歳の時、道隆が亡くなる。この年、藤原氏にとってめんどうな事が起こります。道隆が、いよいよ臨終が近くなってくると、どうにかして、伊周に関白の職を譲っておきたいと一生懸命になる。そこで天皇に使いをつかわせて頼みに行くと、天皇は「道隆の病の間、内覧を許す。」という結果がでる。伊周を初め、道隆一家、特に道隆の妻（高階貴子、なかなか権力を持っている家の出で、中関白家一族の発展に一生懸命になるのです

が。）高階家の人達が、この結果を不満とし、「病の間、内覧」というのは気にくわないから「病の間」の「間」という字を「替えて」という字に書き換えて欲しいということで、天皇にもう一度使いを遣わせる。一条天皇は、まだ若いのでそれに対しすぐに結論は出せず、「関白にお任せする。」即ち、道隆の判断に任せる、というようなことを、いわれる。ところが、道隆は重病で、そのまま亡くなってしまう。とうとう「病の間」から、「病にかえて」に直すことは実現しなかった。「病の間」であれば、道隆が亡くなってしまえば、その後、どうなるか全く保障されていないし、万一道隆の病気が治れば、又どうなるかわからない。ところが、「病にかえて内覧」ということになれば、道隆が亡くなれば、当然伊周の所に「内覧」がくることになる。一字違いで大きな差なので、中関白家では大騒ぎをする。この辺の事は『小右記』に詳しくでてくる。伊周としては、実現出来ず残念であったが、関白は、その後誰にきたかというと、道隆の弟である道兼に「内覧」ではなく、関白がくだる。ところが、道兼は、それを大変喜んだのですが、天皇に奏慶をした日から、まもなく病気となり、7日で亡くなってしまう。ちょうど、この頃は流行病がはやっていた時で、世の中では、道兼のことを7日関白と呼んでいます。

伊周は、ここで道兼が亡くなったので、今度こそは、自分の所へ関白がくだるのではないかと思い、又、高階家一家の人々も、お祈りなどして騒ぐが、結局、道長に内覧の宣旨が下り、伊周は、空しく敗北する。

こういうのが道長に内覧がくだるまでの一つの中関白家一家の悲劇である。それに至る前に、先にも述べたよう、正暦3年には、道長と伊周が一緒に権大納言になったということを述べたが、正歴5年には、道長の権大納言を越えて伊周が内大臣になっていたことがあり、伊周は、しめたものだと思って、問題なく道隆の後の地位が自分にめぐってくるだろうと思っていた。ところが、一時、内大臣になったものの、余り早い内に昇進することが、かえって仇になることも有り、平安朝の社会が、なかなか、難かしいものであったこ

とがわかります。

道長への内覧宣旨の背後には、東三条院の詮子（道長の姉で、一条天皇の母。当時非常に活躍をしていた人）のちからが、大きいことを忘れられません。天皇が、伊周にするか、道長にするか、大分迷っている時に、この詮子が、非常に活躍をして、伊周というのは、余り、りっぱでもない、これはどうしても道長にしなければ、世の中は治まっていかない。伊周が内大臣になった時、道長を超しただけでも哀れであった……というような事を、一条天皇の寝所まで入っていって、夜が明けるまで一条天皇を口説いて、やっとのことで、道長の内覧宣旨がくだったということが『大鏡』にくわしく書かれております。

これは『大鏡』に出ている一つの説話ですが、まず信用してよいだろうと思われます。陰になり日向になりして、詮子が道長の為に一生懸命になる。やがて、道長は22歳と、23歳の時に結婚している。22歳の時には、源倫子と、23歳の時には源明子と結婚しているが、源倫子との結婚の時には、道長の方から倫子に申し入れ、結婚を迫ったが、倫子の父親は反対し、こんな若い青二才に結婚させる気はない。自分の娘はもっと皇族と結婚させたいと、父親の雅信は言ったが、母親の穆子の力によって、この結婚は成立したということが栄花物語に書いてある。もう一人の妻、源明子の時には、東三条院詮子の力が、かなり働いている。源明子という女性は、有名な源高明の娘で、高明は例の安和の変で太宰権師として左遷させられた人物。醍醐天皇の皇子で村上天皇の弟であり、日本最初の有職故実の書物、「西宮記」の著者である。

「西宮記」が左遷される前に出来ていたのか帰ってきてから書いたのかまではわからないが高明は源氏の中でも秀才で、学者であった。この高明が亡くなってしまうと、源明子は、誰も育てる人がいなくなり、結局、東三条院の詮子が引きとって、育てていた。道長が求婚する前に、既に兄の道隆とか、その他大ぜいの者が、明子の器量が美しかったせいか、聡明であったせいか、又源高明の娘であった為か、求婚したが、東三条院の詮子は、他の者には許

さず、道長が求婚の時には、すぐに許したということが、栄花物語に書かれている。これも道長という人物が、若い時から優れていたことを証明する一つの説話だと思われます。

このように、東三条院詮子は、何かにつけて、道長のためにいろ々手を尽くし、そのおかげで内覧宣旨が、長徳元年にくだり、この時から道長の世の中が、始まります。これ以後は、伊周がいくらもがいても、通用しなくなります。しかし、悪い時には悪い事が重なる訳で、その翌年長徳２年に「長徳の変」という事件が起こる。これは伊周達が始めたことであって、即ち伊周の弟の隆家も、これに関係が深い。伊周が、なかなか摂政にもなれずにいることを隆家は共に嘆いていましたが性格的にも、なかなか豪傑肌の人物でした。長徳の変とは、花山院が、ある女性に通っておられたが、それは為光の娘であった。為光には、３人４人と娘がいて、為光の娘の中、花山院が通っていたのは、四番目の娘。この時、伊周も為光の娘（為光三女）に通っていた。伊周の通っている娘の妹に花山法皇は通っていたわけだが、伊周は憂鬱で頭が混乱していたためか、自分の通っている娘と花山法皇の通っている娘とが同じ人物と誤解し、自分の恋人を花山法皇が奪おうとしているという風に考えたらしい。これに腹をたて、花山法皇が夜通っていかれる時に、弓をもっておどしてやろうと伊周と隆家が考え、夜、従者に弓を射たせる。さて、弓を射った所、花山法皇の袖に弓が当たった。だが、けがも無く、大事には至らず済んだのですが、ともかく法皇に弓を向けたということは大変なことであった。大問題になるのは当然であり、その上、伊周には他の二つの問題が重なる。一つは、密教でいう技法で、皇族だけしかやってはいけないという規定がある、宗教の技法「大元帥法」を伊周と隆家が密かにやっているという噂が流れた。又、東三条院詮子を伊周と隆家が呪っているという評判も立ち、その三つの事情で、二人共、都から左遷され、「太宰権帥」と「出雲権守」として、各々、九州と出雲の国へ、流されることとなる。この宣命が出たのが、長徳２年の４月24日の事で、『小右記』にも「栄花物語」にも非常に

詳しく出ています。

この事件に関し、実際に三つの事件があったのかどうか疑ったり、伊周が先に内大臣になった事にうらみを持ち、道長が仕組んだ事ではないかなどという説も古くはありましたが、よく考えてみると、長徳元年に既に道長は、内覧宣旨をもらっている訳で、たとえ、その前に内大臣に先を超された時に、多少恨みをもっていたとしても、自分が内覧宣旨になったならば、今更何も、伊周を追放する必要は無い訳で、従来言われていた道長の方で仕組んだという説は難かしいのではないか。この事件はやはり、伊周と隆家がいらいらしているとき、自分達の方からつまらない事件を引き起こしたと見てよいと思います。栄花物語には、ただ弓を射って、花山法皇の袖に弓が触れた程度の事しか書いてないが、この事件をその日の『小右記』で見てみると、もっと大事件で、伊周と隆家の従者達が、花山法皇の家の方まで走っていき、そこで争乱をやって、花山法皇につかえている幼い童の首をとって、その首を持ち帰ったということが、書かれております。こうして、長徳2年に伊周・隆家の二人は九州と出雲に左遷されたもののその翌年、まもなく罪を許されて帰ってくる。

『御堂関白記』に、この辺の事が、どう書かれているか、少しお話します。

『御堂関白記』は、どこから書き始めているかというと、長徳4年、道長がちょうど33歳の時から始まっている。ところが『御堂御記抄』という抄出本があって、これによれば、長徳元年があり、恐らく『御堂関白記』は、長徳元年から書かれていたと考えてよいと思います。ここで問題は、それより以前に、全然『御堂関白記』は書かれていなかったのかという点ですが、私の考えでは、長徳元年が、『御堂関白記』の書き始めであったとみてよいのではないかと思います。というのは、長徳元年は、道長30歳。内覧宣旨を得た年で、右大臣となっている。長徳2年には、既に左大臣になっているので、元年に内覧宣旨をもらい、しかも大臣となったということで、これから自分は政治家として活躍していかなければならない。となると、日記を、きちん

とつけておかなければならないというところから、長徳元年から日記を書き始めたとみて、まず問違いないと思う。これについても、それよりも前に幾らかの日記があったが失くなってしまったのであろうという風に考える説もありますが、私は長徳元年が、日記のつけ初めと考えています。日本風の漢文の日記には、書き初めの記事が、非常に少なく、段々と詳しくなっていくのが特徴で、『小右記』をみても、最初の方は非常に簡単な記事で、慣れるにつれて、次第に詳しい記事となっています。

『御堂関白記』も、長徳年間と長保年間とは非常に記事が少ない。長徳の次が長保ですが、長保の方が長徳のものよりやや詳しい。更に寛弘になってくると、非常に詳しくなってくる。長徳年間の日記が非常に簡単であることについて、それは、書き初めでまだ書き慣れていないので簡単であるという風に私は考えておりますが、或は次のような説もあります。

即ち、道長としても、伊周との争いは、大分つらかったので、それらについてを、いちいち書き記すのがいやなので書かなかったと。なる程中関白家とのいざこざの争いが、長徳元年にある訳で、長徳二年には、伊周、隆家が左遷される年だが、そういう事は、一切、御堂関白記には書いてありません。

又、中関白家の第1皇子である敦康親王という親王―― 一条天皇と中宮定子の間に生まれた――が誕生した事も『御堂関白記』には書いていません。

このような理由から、どうも中関白家の事は、意識的に道長が書かなかった。道長本人としても、中関白家には余りいい思い出を持っていないので、とても書きにくくて書けなかった、という見方です。しかしこの見方は難かしいのではないか。というのは、他の記事が、たくさん書いてあって、中関白家の事だけ書いていないというのであれば、それも考えられますが、他の記事も長徳年間は非常に簡単にしか書いていないので、中関白家が書いていないからと言って、意識的に書かなかったのであると、かんたんには言えない要素を含んでいます。

道長という人物は、そんなに気は小さくなかったと思うし、筆がもっと書

き慣れてきている頃で、多くのことがらを書いているときならば、この中関白家とのいざこざも、恐らく、もう少し書いたであろうと思います。まだ書き初めなので、書かなかったのではないかという見方をした方がよいと思われます。

『御堂関白記』は、長徳年間は記事が少く長保年間からしだいに多くなり、寛弘年間に入り自分の活躍が大きくなってくると、それにつれて、日記の記述も段々とくわしくなってくる。このように見てまいりますと、『御堂関白記』は、やはり、政治家道長の日記、即ち、大臣として、内覧として、自分がかたづけていかなければならない仕事というものを、きちっと書き記していく。おおよそ、公家の漢文の日記というのは、そういう性格のもので、女流日記とは大へん違う。女流日記は、感情も、多く書くが、男性の日記は、政治家として運営していく為に書いていくと見るのが普通で、三十歳から書き初めたとすると、『御堂関白記』は本当の政治家としての日記であると見てよいと思います。

長保二年に、有名な上東門院彰子が、一条天皇の中宮となる。しかし、以前に道隆の娘定子が既に中宮になっていたので、新たに道長の娘彰子が入って、一人の天皇に二人の妃が立ち、初めての事となる。(今までは、一人の天皇には、一人の妃が原則であった。)これは、客観的には道長の強引性というものが考えられます。しかしこの時藤原行成の日記『権記』によると、定子は伊周が左遷される時に余りのショックで自分で髪を切り、出家をしており、後に還俗して皇子・皇女が生まれていて、非常に中途半端な出家だったことになるが、とにかく一度出家した中宮が、京都にある藤原氏の大原野神社の祭りに参加するは無理なので、新たにもう一人中宮を立てるのは当然であると、行成が道長に勧め、道長は、その言葉に自信を得て、彰子を中宮にしたのです。定子は皇后となり、これより道長と彰子の一家は外戚として発展してゆきます。

彰子から新たに敦成(あつひら)親王が生まれ、親王は後に、後一条天皇となる。敦康(あつやす)

親王は、第一皇子であったにもかかわらず、既に定子が亡くなり、道隆も亡くなっていた為に、後見が無いという理由で、東宮にもなれずに一生を終わります。

摂関政治を見ていくと、その表面には、道長のように非常に明るく、めでたく発展していく人と、中関白家のように哀れに没落していく人と極端に分れてゆきます。歴史の研究において、この華やかな方ばかりを見るのは片手落ちで、中関白家の場合のように、敦康親王が天皇はもちろん、東宮にもなれずに一生を終えたという事実を、同時に見ておかなければなりません。

さて、その後、一条天皇の時代は、道長は幸せに過ごしていましたが、三条天皇の時代は、手離しで幸せとは言えない。即ち、三条天皇には、道長の次女の妍子を中宮にするが、三条天皇と妍子との間には、皇女だけで、皇子は生まれず、道長は外戚となれなかった。皇子の生まれなかった事を道長が嘆いていたことが『小右記』や『栄花物語』などに書かれています。ここで、皇子が生まれれば、一条天皇と、三条天皇の両方の外戚になれた訳ですが、そうなれず道長にとっては、多少残念であったようです。

その結果、三条天皇との間がしっくりいかず、三条天皇の方は眼病がひどくなり、晩年には少し先も見えなくなるという状態であった。世の中を悲観されて、これ程目が悪くなったのでは、どうにもならず位を下りたいというような事をいわれる。その辺の事情を藤原実資の日記『小右記』は、くわしく書いている。この実資は、道長のライバルであった。道長が摂政になったにつれ、実資の方は、やっと最後に、右大臣になった程度で、大分、格差がある。これが道長に対し実資が不愉快な気分をもった理由であり、三条天皇時代の『小右記』を読んでみると、とことん道長のことを悪く言っている。三条天皇が眼の病が大分悪くなってきて、余り目が見えなくなってくると、それを機に道長が盛んに三条天皇に譲位を勧めたということが『小右記』に多く出てくる。

もし三条天皇が位を下りてくれたら、そのときの東宮である敦成親王（道

長の外孫。母后彰子）が一日も早く後一条天皇となれる訳で、道長の気持ちの中には、そういう気持ちも、あったに違いないと思うが『小右記』は、悉く悪く書いていて、道長は三条天皇の目の悪いのをよいことに、位を譲位することを勧めているという。これは「大不忠」の人なり、と書いている。この他にも似た表現が盛んにでてくる。三条天皇の晩年の頃には、道長はまるで天皇のようだ。王道はいよいよ弱く、道長は、天皇代わりのようで、三条天皇はロボットのようだと言っています。

この時『御堂関白記』はどうであったかを見てみると、三条天皇と割合和気あいあいとやっている様子が書かれている。私は三条天皇時代の『小右記』の書き方は、多少オーバーではないかと考えていますが。道長の人間像には、この『小右記』の中の三条天皇との間柄をそのまま書いてあるのも、時たま見受けますが、我々がそのまま信用してよいかどうか、もう一度道長の人柄を考えてみる必要があるのではないかと思います。

三条天皇は眼病がひどくなられ、譲位する少し前に「心にもあらで憂き世にながらへば、恋しかるべき夜半の月かな」と歌われる。三条天皇には妍子よりも前に娍子が女御となっており、敦明（あつあきら）親王が生まれている。三条天皇はこの敦明親王を次の東宮にたてるようにという条件つきで位をおりたいと、道長に言い、道長も遺言としてそれを受ける。この辺の事は『小右記』に詳しく出ています。（だが、この敦明親王は、1年で東宮を下り、小一条院となった。）

後一条天皇は九歳で即位し、敦明親王が二十三歳で東宮となる。時代は、そのまま後一条天皇の時代に入る。天皇は九歳の幼席で摂政がついて補佐するというのが、摂関政治の第一の道理なので、道長は、この時初めて摂政となる。今まで、一条天皇の時には内覧、三条天皇の時には、天皇即位後、道長に関白になるようおっしゃるが、道長は、「今年は慎むべき年であるので関白にはなれない。」と断っている。この事は、『御堂関白記』の三条天皇が即位する時の寛弘八年の條に詳しくでています。

陰陽道でいう慎むべき年であったかもしれないが、道長としては、三条天皇の時に、関白になりたくなかったのではないかと思われます。それで三条天皇の間もずっと内覧として過した。ただ三条天皇の最晩年の一年間は、三条天皇は道長に全て政治を任すので、関白になるのが嫌ならば「准摂政」としてやって欲しいと言われ、三條天皇の晩年の1年のみはそういうことになる。そして、後一条天皇が即位すると、道長は摂政となり、初めて自分の孫が天皇となって、良い世の中になった気分と想像される。そして、後一條天皇に3女の威子が中宮となり、このとき道長はしあわせのあまり、「この世をば…」の和歌を詠んだのである。(寛仁2年10月16日)

長和5年に道長は摂政となり、6年は寛仁元年と年号が代わり、道長は摂政をやめて自分の長男の頼通に位を譲っている。とすると、道長は一年しか摂政をやっていないことになるが、早く頼通を一人立ちさせようという意味もあったのではないか。暫く、無位無官でいたが、その年の12月に、道長は太政大臣となっている。

一旦、摂政を譲ったものの、後に太政大臣になるのだから、頼通の背後で、色々政治を見ていたのではないだろうか。この時、道長は51歳であり、54歳で出家をする。出家をすると日記、『御堂関白記』も、もう書かなくなり、寛仁3年、54歳の時には体を悪くし、『御堂関白記』の中で、目が大分悪いと、三条天皇と同じような事を言っている。二、三寸先の人の顔もよく見えなくなって、医家に相談した所、魚肉を食べるようにと言われたので、これから魚肉を食べるようにしたいと書いている。私的な事は『御堂関白記』のような日記には書かないのが普通だが、眼病の為に栄養をつけるのに、魚肉を食べることにしたのも、自分個人の為でなく、法華経の書写が出来なくなっては非常に残念だから食べるのだ、と書いています。

寛仁3年まで日記をつけ、その年の3月21日に出家をする。出家後は、ほとんど日記はない。その翌年、寛仁4年に2、3日間位、日記をつけている。

翌年の治安元年は念仏の記事が5行ばかり、日記にあるが、大きく言えば、

出家と同時に、日記は無いと言って差し支えない。あとは、法成寺というお寺を建て、そこにこもり宗教生活に入る。この宗教生活は徹底したもので、名前も行観・行覚とかえる。万寿4年、62歳で亡くなる。亡くなる時は、法成寺の中で阿弥陀の手に結んだ糸を自分が握ったままで亡くなった。と、栄花物語に臨終の場面が詳しく出てくる。出家後の法成寺のことは、『御堂関白記』にはないが、『小右記』に、道長の法成寺の生活が詳しく書かれているので、これによってくわしく知ることが出来る。栄花物語では、巻15～30までが、道長の寺の中の宗教生活を書いておりこれはたいした資料で、元の資料は何を使用したかよくわからないが、『往生要集』等は、かなり原資料として書いているのがよくわかる。巻30で亡くなるが、死の場面も、我々の涙を誘うように詳しく書いている。

『源氏物語』が、光源氏の死を、「雲隠れ」の題名だけで死を描いていないのと比較して『栄花物語』では、道長の死が、非常に詳しく描かれている点など、一つの栄花物語の偉大さではないでしょうか。

道長は62歳で亡くなるわけだが、かなり専横をきわめた男だという考えを持たれていると思う。道長の摂関政治イコール政所政治であるという説が昭和の初期に既に出ています。摂関家に政所があり、そこで色々な文書を出す。これを「下文（くだしぶみ）」とか「御教書」などと言うが、道長が直接書く訳ではないが、道長の家司（けいし）の人たちが作って出す御教書を見てみると、かなり政所から出ていて、道長は一人で色々な事を決定し、天皇には余り相談しない政所政治で、律令政治は、この当時崩壊してしまっていたという説が、最近まで続いていた。

戦後、歴史の研究の進展の結果、この文書を見ていくと、確かに、以上の説のように道長が、勝手な事をしている所なきにしもあらずではあるが、それらは道長の荘園に関するものばかりである。

こと公に関してのものは、朝廷に行き、太政官の陣の座に行き、公卿達を全部集め、公卿会議をしているのが真実である。荘園関係のものだけをみれ

ば確かに政所政治らしいものもみられるが、公に関するものは、公卿を全部集め、天皇の前で、天皇の処理を仰いで決定している。

最近の平安期の研究は、摂関政治は、イコール「太政官政治」であるという見解である。昭和初期の歴史家が出した摂関政治イコール政所政治というのは間違いであると言わざるを得ない。太政官政治イコール律令政治の延長線上に摂関政治が有り、摂関の個人々々の性格によって、下手に動かすと横暴になってしまう事も有るが、道長は律令政治の上にのって、太政官政治を行ない賢く立ち振舞っていったと考えられる。道長という人物は、気の毒な人が出現すると、必らず援助の手を差しのべるということを一生やってきた人物でもある。

摂関政治は、外戚の政治であって、娘が天皇の中宮になり、皇子が生まれるという外戚政治が大きな位置を占めていたので、これがうまくいかなくなると、たちまち崩れる。道長の後の頼通の時代に、これがうまくいかなくなった為に急激に没落していってしまう。摂関政治は道長の時までは保ってきたが、律令政治の延長線上にあるとはいえ、種々の矛盾を含んでいたと考えられるので、道長の後は、崩れてしまったというのが、摂関政治の本質の一部であろうと思います。

『御堂関白記』は、政治家道長の日記で、内覧、左大臣、太政大臣と進んでくる間に、それぞれの政治家の生き方を書いていったものと考えられます。この時代はきびしく勤務評定のようなものが存在し、太政官八省に毎日出勤し、出勤率が悪いと、昇進の場合、後輩が飛び越して上ってしまうこともあり、平安朝の貴族たちは優雅な生活だけをしていたなどと想像されるのは間違いです。

有職故実の方では、当時道長の時代に、藤原氏の中でも「小野宮家」と「九条家」に分かれ、(道長は九条家)、先祖代々受け継いできた有職故実の作法、年中行事の儀式作法はどう行なうかと詳しく日記の中に書きつけ、道長は大らかな性格で、両家の良い所をとり入れた礼儀作法を考えたいという箇所が

見えます。「小野宮家」と「九条家」の儀式次第を「御堂関白記」は非常に適確にとらえています。政治家、道長の日記であることは、言うまでもなく、道長の毎日の記録ではあるが、その中に、主題とは言えないが、（日記文学には主題があるが、日記には主題がないので）我が家の発展してゆくところを非常に喜んで書いている、一つのもりあがりのように書いているところがある。自分の娘や息子に関するものを、正確に記すだけでなく、あふれる喜びというものが「御堂関白記」に所々見える。これが『小右記』だと、ただ正確に書くだけで、実資の気持ちが余り出ていない。最後に、『御堂関白記』という名称については道長は関白にはなっていないので、関白記と呼ぶのは間違いですが、平安末期から道長のことを御堂関白殿と呼んでいるので、それがそのまま、呼び名となったのであろうと思います。

以上、まだ、お話し申上げたいことも多いのですが、時間もせまってきたため、これで終らせていただきます。道長の生涯と『御堂関白記』について、いくらかでもおわかりいただければ、幸せと存じます。

なお、『御堂関白記』は、京都、陽明文庫に道長の自筆本14巻（半年１巻）が、古写本12巻（１年１巻）とともに現存致しております。